―文 芸―

草の丘

第 16 号

2019 年 6 月　印旛文学の会
URL htpp://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第十六号（二〇一九年 六月）

目次　草の丘 第十六号

《詩》
その日が来たら　中川とら　……一
《短編》
終の棲家　灰田隆平　……三
ＡＩが書く小説　畑中康郎　……九
《連載小説》
そよのバアバの空中サロン
―その七　私という存在―　中川とら　……一七
《紀行文》
新しき村　紀行Ⅱ　唐瀬　光　……二二
《エッセイ》
高齢者の認知機能検査を考える　灰田隆平　……三一
北条政子の演説　畑中康郎　……三四
松虫姫伝説とその小説　香取　淳　……四〇
《カット》
高橋より

その日が来たら

中川　とら

人生の終わりが近づいてきた
かつて感じたことがない
緊張とわずかな興奮すら感じる
準備し整え　感謝して旅立ちたい
賢明に生きたから　最後は大声で
どんなもんだい　と叫ぼう
不安なんてないわ

本当によくがんばったと思う
他に生くべき道はなかったから
時に怖気づき愚かな日々もあったけど
歯をくいしばり一筋に生き抜いた
だから　そう
不安なんてないわ

力尽き　前へ進めなくなくなった時
どこからか　懐かしい母の笑い声が聞こえてくる
わたしを呼んでいるのかしら
ああ　お母さん
あなたとの約束は果たしました
もうすぐ　会えますか

意識がだんだん遠くなって
何もかも静かで気持ちいい
わたしはとても軽く　どこに居るのかわからない
でも
不安などというものはありません

気のとおくなるほどの時が流れ
再び
私と言う生命体が結実したら
歓喜のうぶごえをあげよう
そうして今度こそ
志高く　人々の役に立つ　生き方をしよう

終の棲家

灰田　隆平

五月はいつもの年なら晩春と言われる時期ですが、今年は初夏と言ってもよい暑い日々が続きました。私はニュータウンの自宅近くにある高台が好きでよく登ります。この小高い山は人の手によるものだそうです。真っ平らな台地に拓くニュータウンだから変化が欲しい……と遊び心で造られたものらしいです。今日も建設中の住宅団地をひと時眺めた後、一キロほど先にある集落を訪ねました。

この集落は、今はニュータウンの隣ですが、昔は人里から離れた地域でした。

その村の裏に広がる荒漠たる原野にはつい数年前までタヌキやキツネが棲みついていたといいます。

この集落の庚申塔や如意輪観音、馬頭観音などの石仏が並ぶ一角にはお堂があります。

そのお堂は、お世辞にも美しいとは言い難いのですが、柱が斜めに傾いていて、いかにも古そうです。しかし、このお堂には扁額も見当たらないし、お参りするときの鰐口を打ち鳴らす綱もなく、何を祀っているかの説明看板もありません。

私は、前にも一度ここに来たことがありますが、妙にこのお堂が気になりました。一人で対峙していると、数百年前の

威容が偲ばれるのです。そのとき、格子の隙間から覗いてみたのですが暗くて内部はよくわからない。仕方がなく中をカメラで撮影してみました。後から紙焼きして拡大してみると乳房の形をした布状のものを張り付けた絵馬らしいものがいくつかあるようでした。

そこで、その日は地元の方に聞いてみようと思い立ったのです。

隣家の御婦人にお訊ねすると、「あれは観音堂だョ」というのです。

観音様のお姿はカメラで捉えられなかったのですが、観音堂というからには観音像を安置したお堂なのでしょう。絵馬のことを思い出しました。これは昔、乳の出が悪い女性たちが、赤児のすこやかな健康を願い熱心にお参りをした……。そのような歴史があった観音堂に違いないと確信しました。

「観音堂はいつごろ建立されたものなのでしょうか」と再び訊いてみましたが、その御婦人は小首をかしげて言いました。

「さあ、私らは嫁に来たものだから古いことはわかりません。あの角の家が管理しているので、そちらの御婆さんに聞いてみたら」というのです。

そんなわけで私はその家を訪ねました。お宅には老婦人がいたのですが、「息子が管理しているものだから、帰ってから聞いてみます」という返事。仕方なく私は名刺を置いてきたのです。

やあ、驚きましたね。その晩のことでした。

「他人の家に来て貴様は何を探りに来たんだ。俺がいたら叩き殺すところだったぞ！」

電話口でいきなり怒鳴り声が響きました。夜も９時近かったでしょうか。それは私が昼間に尋ねたその農家からだということは直ぐに分かりました。

８年前、私は娘夫婦と孫が暮らす南関東のこの街に転居してきました。都内の小さな家を処分して、この街で中古のマンションを買ったのです。建設から１０年程度しか経っていない物件でしたが、都内と比べると大変安価で驚きでした。十分おつり銭がでるほどだったのです。

「こんな高齢になって新しい土地で友達が作れるかしらねエ」と心配していた妻も今では「緑が多く静かで、第一空気がきれい、都内より買物も便利ョ」と喜んでいます。転居す

ると直ぐに近くの公民館で趣味のサークルを探し、そこで何人か友人も見つけたようです。都内の昔の友人たちとも電話でおしゃべりを楽しんでいますが、旧地を懐かしがるよりも、「ここはいいところよ」と、もっぱらこの街の良さを宣伝しているほどです。

私の方はリタイア後、近くの大型店舗で駐車場の管理などの仕事をしていましたが、それも2年前に辞めました。カメラや動画撮影が好きでしたから、ネットで見つけた近隣都市のサークルに通っています。

そのサークルで会員それぞれが取材した短編記録動画の発表会が行われることになったのです。それまで私はニュータウン近郊で自然の風景や鳥や草花を撮ったり、集落にあるお堂や祠、石仏を撮影していました。

しかし、短編の動画となると孫の運動会の撮影のようなわけにもゆきません。映像の美しさだけでなく、他市のサークル仲間に「へぇー」と関心を持たせ、現場に行ってみたいと思わせるようなストーリーや面白さが必要だと感じたのです。この街にも由緒ある古刹や重要文化財のお堂はあるけれど、有名なところはすでに誰かが映像や文芸作品にしています。むしろ誰も知らないような鄙びた風景こそ新しさがあり、皆を惹きつけるだろうと思ったのです。

「これは面白いお堂を見つけたぞ」という軽い気持ちで取材を試みたのですが、怒鳴られてしまいました。何か相手を怒らせるような無礼を云った覚えはないのです。

一方的に怒鳴られたまま、私は何の抗弁をすることもできませんでした。いえ、それよりこちらが口をはさむ余地さえ与えないほどの剣幕だったのです。

直接会ってこちらの真意をお話ししようかとも思いましたが、さらに混乱するかもしれないという思いが沸き上がってきました。しかし、このままでは動画発表会には間に合わない。何か方法はないものかと考えました。

数日たってから、何度か講演を聞いたことのある地元の歴史サークルの幹事のHさんを訪ねました。

Hさんは「その集落の成り立ちのことは知っているし、その集落を通り抜けたことは何遍もあるが、特別な話題も少ないので取材にいったことはないね。観音堂の謂われですか。そもそもそこにお堂がある事さえ気付きませんでしたね。何か史料がないかあたってみましょう。数日待ってください」

とのことでした。

そして、三日後、Hさんからメールをいただきました。

そのメールによると、その集落は江戸時代初期の幕府牧の開墾により誕生した村の一つであり、最盛期でも15軒程度、明治期になった頃は10軒の小さな集落であったこと。村の設立当初から二百数十年間続いていた幕府の直轄領ではあるが、田圃はなく畑地20余町歩だけの生産力の低い村であったこと。その村の畑地の約半分近くを所有していた開発名請人（注＝地権者）でもある名主の家は、明治から大正期に掛けて離村したため、今では村の史資料があまり残っておらず分からないことが多いこと。観音堂も昔は名主家の管理するものであったが、離村に当たり集落内の縁者に引き継がれたものである事。そして、大正期に記されたこの地方一帯の地誌にも、この村のことは、「通称壁無と称す。これ土質の壁に適せざるより、その昔、民家に壁を設けず藁を以って防風の用に供せしが故と土俗の口碑に残れり」とだけしか書かれていないというのです。

この「壁無し」という意味は、貧しかったこの集落の蔑称のようになっていたようですが、近隣の町場で菓子屋を営むこの集落出身の方が、それを逆手に取り「壁無し屋藤右衛門」を看板にしたというのです。「何か底知れない意地と気骨を感ずる話です」と、Hさんの添え書きにありました。

「明治の時代になり、土地に縛られなくなると、特にこの村の人たちは狭い村から飛び出して隣の町場で一旗揚げようと頑張ったようです。ある人は借金までして様々な未経験の職業に手を出しましたが、世間の荒波に振り回され、倒産するものも出て苦労したようです」とも書かれてありました。メールに添付された「村の概要史」にはそんなことが綿々と書かれてありました。

そのメールをくれたHさんは、後からこんなことも言っていたのです。

「電話で怒鳴られたという話ですが、貴方が何か失言したからだというわけではないようですョ。市の職員が文化財調査で伺った時も同じような対応をされたという話を聞いていますから」。

そしてHさんは私にこうも言いました。

「この土地では、近所中が生まれも育ちもお互いに分かっています。あの家の親人（注＝この地方の言い回しでは親のこ

と）はどの村から嫁いできたとかいう話まで多くの人がお互いを知っているのです。数代前の先祖の歴史と共に生きてきたようなものです。先祖たちの過去の歴史が今を生きて行くうえで有利に働いたことも、妨げになったことがあったのかもしれませんね。何も知らない他所者が、触れられたくない家の過去の傷口を物珍しそうに探りに来ているのではないかと許せない思いがあったのでしょう」と。

都会で長く暮らしてきた私たちニュータウンの人たちの先祖だって、きっと自慢できる話ばかりではないはずです。それでも両親や祖父母・曽祖父母の時代、或はもっと前の先祖の時代にあった出来事が、重くのしかかるという体験を私はしたことはありませんでしたし、考えたこともありません。

いや、待ってください。都会暮らしを転々とした私の父や祖父たちも、転居するたびごと無意識のうちに過去を清算してきたのかもしれませんね。そうして結局、負の遺産を私たちに伝えてこなかったのではないか、そう思えてきました。

これまで私が地元の歴史サークルなどで聞いたり、読んだ地域の歴史は、それぞれ立派な誇りある人物たちの活躍の歴史でした。語り継がれる成功者のいる陰で、ひっそりと苦しんだ人も多かったに違いないのだなと考えさせられました。

私も含めてニュータウンに住む人たちの多くは、親戚もいないし、少年期を共に過ごした竹馬の友もこの土地にはいないから困ったことが起きても頼り合う人がいないのも事実です。

だからというわけではないのですが、私たちも娘夫婦の住む街を終の棲み家にしたのです。何か若い人たちの力になってやれることがあるかもしれないと思ったからです。

隣で妻が、「あら、その反対じゃないの、私たちが元気なのは今のうちだけョ。これからお世話になるのは私たちの方かもョ」といって茶々を入れていますが。

ニュータウンは、お互いに過去を知らない者同士が住む街です。隣の人がどういう会社のどういう地位にある人だとかを知りません。たまには自慢げに言う人も居るにはいますがそういう人は直に嫌われてしまいます。地域のボスもいないのですから、余計な気遣もありません。

だからでしょうね。転居してくると妻は直ぐに友達を作り、誰よりも昔から住んでいたような顔をしているくらいです。

それが良い所かもしれませんね。
数百年も人間関係が続いた歴史と伝統がある街と、全国各地から異なる文化を携えて移住してきた人たちのニュータウンが一つになって、これからの新しい歴史を作ってゆくのだなあ、とつくづく思いました。
あっそうそう、動画発表会の件ですが、今回はこの観音堂のことはスルーすることにしました。一枚のショット写真なら、鄙びた雰囲気を映し出すだけでよいのですが、動画にしてストーリーを語るには、観音堂の歴史も、それを伝えて来た集落の人々の思いも何も取材できていないのですからね。
だからといって怒鳴られたことを、根に持っているわけではないですよ。苦い体験として残さずに、もう少し地元の人たちと親しく出会ってからじっくり考えるきっかけにしたいと思ったのです。

〈了〉

「印書文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

ＡＩが書く小説

畑中康郎

ある日の午後、まだ早い時間のことだった。虎ノ門で地下鉄を降り地上に出たとき高校の頃親しかった、あの村瀬に会った。卒業以来だったから二十五年振りの再会というわけだ。仲がよかったからそれほど長い間会わなかったのが不思議に思える。

村瀬を見た瞬間、その変わりように驚いた。髪には白いものが随分と見られたし、顔にはやや深めの皺が何本かあった。そして淡いシミ。そのうえ無精髭が伸び放題だったから全く別人の印象だった。それでも男が村瀬であることが、ボクにはわかった。苦労して人生を送ってきたに違いない。苦労は顔に出るものだ。

「おいっ！　村瀬じゃないか」

ボクは思わず、大きな声を出した。行きかけた男は驚いて振り返り、ボクの顔を凝視した。そしてすぐに破顔した。

「三井か。少しも変わらないな。若いよ」

「若いも何もない。まだ四十三だぞ。ま、そんなことより久しぶりだ。今晩一杯やらないか」

ボクは思わずそんなことを口にし、二人は飲む約束をしてその場は分かれた。

その晩の新橋駅近くの居酒屋。長い間会わなかった分、話したいことは山ほどあって話しは尽きなかった。幸い二人とも翌日は休日だったので幾分気が楽だったのだろう。村瀬は高校を卒業して文科系の大学に進学した。そこまではわかっている。その後、大学生活はバイトと仲間との交遊が中心であまり勉強はしなかったようだ。就職は売り手市場の頃で、彼のような不勉強な者でも難なく出版社に職を得ることが出来た。編集部に所属し今ではどうやら副編集長とのことだ。

一方ボクの方だが、理科系を選んだ。大学時代はとにかく真面目に勉強した。これは性分だ。入学と同時に目標を持ち、将来は世間をリードする先端技術分野に身を投じる計画だった。そして大学院に進学しそのまま研究室に残った。今では先端技術研究所で研究員の端くれになっている。専門はＡＩの研究。すでにいくつかの論文を書き、科学雑誌にも取り上げられ、多少名も売れてきた。

やや自慢めいたそんな近況を語っていると、村瀬がボクの話を遮るように言った。

「お前はいいよな。大いに将来性のある仕事だ。ＡＩ技術がどこまで進むのか、オレも大きな関心を持っている。それに引き換え、オレの方はダメだ。少し愚痴っぽくなってしまうが、出版業界はこれからますますジリ貧になるだろう。若者が本を読まなくなったんだ。関心はもっぱらゲームだよ。オレの出版社のように小さなところは先行き危ないという噂まで出る始末だよ。たまに出るヒット作で駄作何本かの穴埋めをしている格好だ」

「駄作は始めからボツにしてしまえばいいんじゃないか？」

「それはできないな。作家先生のメンツがある。そんなことをしたら次の原稿を書いてくれなくなる」

「難しいものだな。それでどうなんだ、そもそもヒット作と売れない作品を事前に見極めことは難しいのかい？」

「ああ、難しい。わからないと言った方がいいな。わかったら苦労はしない。でも売れる本は一発で分かる。意外性があって、そのうえおもしろいからな。といって、駄作であると一概に判断出来ない場合もある。何かのキッカケで大ヒットすることだってないわけではない。例えば著名な信用できる人がおもしろいといえば、大衆が乗っかってヒットすることだってある」

「そんなものかね？　分からないのは人の心か」
「いや人の心は単純なんだよ。ところで、今思いついたんだが、お前小説書かないか？　お前ほどの頭脳なら小説の一つや二つ簡単に書けるような気がするんだけどな」
　ボクは即座に断った。小説は一本の道をこつこつゴールまで突き進むような技術研究とは訳が違う。小説には読者の興味・関心を惹くストーリーが必要だし、その興味・関心がどの辺にあるか分析する力がいる。魅力的な人物設定も必要だ。どうやってそんな人物を創り出すか、そんな才能はボクにはない。さらにそれに加えて、作家には本来の解決したい思いなり悩みがなければならない。今の自分にはそういう悩みはない。訴えたいものがないのだ。言い換えるとそれだけ今の自分は幸せなのかもしれない。
　それで村瀬に言った。
「無理だ。才能がない。それに今のボクには読者に訴えたいものがない。思想らしきものだって何もない。もともとボクは人文科学に適した頭じゃないからな」
「嫌に簡単に言うなぁ」
　溜め息をつきながら、村瀬は目線をテーブルに落とした。が、すぐに顔を上げると、今度は思いがけないことを言い出した。
「じゃ、ＡＩに小説を書かせることはできないか？」
　ＡＩで小説だって？　果たしてそんなことは無理だろう。内心でボクは思った。
「最近、ＡＩが囲碁や将棋の大名人と戦って勝ったという話をよく聞くけど、あれなんか過去の様々な棋譜を徹底的に覚え込ませるんだろ？　覚えた勝ちパターンを応用して実戦に使っているんだろ？　小説だって、同じだと思うよ。今まで大ヒットした小説のパターンを覚え込ませて、それを組み合わせる。どうだ、お前ならそんなこと簡単だろ？」
　ボクはＡＩに小説は無理だと考えた。その理由は言えるが、後日説明しようと思った。あまりに簡単に村瀬のアイデアを否定したくない。
　それからは話題を変えた。高校の頃お互いが同時に好きになった女子生徒の話題で盛り上がった。たまにはそういう話もいい。後日再会を約してその晩は分かれた。
　昼休み、研究室の椅子に座りＡＩと小説の関わり合いに

ついて考えてみた。
村瀬はＡＩが囲碁や将棋の名人に勝った話をした。あれは何千何万何十万という棋譜を記憶させ、勝負に勝つ最良の組み合わせを瞬時に導き出す。棋譜はアルゴリズムに馴染む。コンピュータは〇か一の組み合わせだからこれは容易だ。だが、小説における会話はどうだろう？　まずコンピュータ側に発言文をいろいろと用意させ、それをどんなときに使うか規則を決めておく。またすでにある文字列中にどれを拾い上げて自分の発言にするか、規則を決めておく。その規則をどう決めるかが重要。しかしそれは天気の話などごく日常のありふれた会話なら可能かもしれない。ところが人間の複雑な感情に対応して、すべてのパターンをＡＩに覚え込ませることが果たして可能だろうか？　人間の感情の起伏や変化は人間自身でもわからないことが多い。それをＡＩにすべて覚え込ませることが出来るだろうか？　難しいのではないか？
ＡＩは理性そのものであって感情がない。ＡＩロボットにある人物を殺せと命令を与えたとする。ロボットは何の感情もなく、命令どおりにあらゆる手段を講じてその人物を殺すだろう。ところが、人間は感情を抑える訓練をどんなに積んだところで、事に及べば人によって良心の呵責や法律による断罪が頭に浮かぶかもしれない。家族があれば家族に波及する影響を考慮する。人間が完全に理性だけの存在になりきることは不可能なのだ。人生なんて不測の事態の連続だ。だからこそ人生はおもしろいともいえる。したがって、その人生を表現する小説がおもしろいという結論になる。
つまりＡＩで小説が書けるのか？　という疑問には無理という結論を出さざるを得ない。

ボクは村瀬に再び居酒屋で会ってこの結論を伝えた。
村瀬は明らかに失望したようだった。そしてその失望が半端ではなかった。完全に落ち込んでしまった様子なのだ。そうしてみると、彼の出版社はかなり切羽詰った状態なのだろう。一本のヒット作で何本かの駄作を補うにしても、そのヒット作が簡単に出ない。だがいくら利益を上げたいからと言ってもＡＩに頼るのは邪道だし、本来感情のないＡＩには無理だ。ボクははっきりと言ってやった。

すると村瀬は先日の話を蒸し返した。
「それなら小説を書くことを再考してくれないか？」
ボクは閃いた。
「わかったよ、魂胆が。ひょっとしてお前さん、ボクの多少売れた知名度を利用して小説を書かそうとしているんじゃないのか？　新進気鋭のＡＩ科学者が書いた小説とか言って。最近は本の中味に関わらず、知名度の高さが売れ行きに関係すると言うじゃないか」
村瀬は舌を出した。図星だった。
「前にも言ったが、小説は誰にでも書けるものではない。芥川や漱石や三島があれほど優れた小説を書けたのも彼らに解決しなければならない課題があったし、壮大な悩みがあった。それを原稿用紙に叩きつけて読者に訴えたんだ。むしろそうしなければ彼らは生きられなかったと思う。そんなことは編集者であるお前が一番知っていることだろうに」
村瀬はいよいよ元気がなくなった。
「出版業界はこれからどうなってしまうんだろう？」
ボクは少し腹が立った。
「おい今度は泣き言か。小説がジリ貧なら出版社として他に出来ることを模索したらいいだろう。ゲームに進出してもいいし、そのフィールドなら先端技術を研究しているボクにも手伝える」
「いや、オレには小説の世界しかない。ゲームはオレには向いていない。小説で勝負したいんだ。どうしてもヒット作を生み出したいんだ。もう一度小説でオレんとこの出版社を蘇らせたいんだ」
ボクはむしろ、その言葉を聞いて安心した。大学時代、ろくに勉強もせずに貴重な時間をムダにしてきたらしい村瀬ではあったが、今では自分の生きる道を見出している。倒産寸前なら実際倒産するまで自分の信じた道で勝負したらいいのではないか。彼には小説しかないならそれもいい。収入の道を断たれ、家族に対する責任が果たせなくなったって目が輝いている男を家族は見捨てないものだ。食うや食わずになったところで生きていける。最後はアルバイトをしながら小説という夢に挑戦したっていい。そんな夢のある男を家族は見捨てないものだ。
「村瀬、お前が書けよ。今の出版社に入って何年だ？　こ

れまで数多くの若手から中堅から場合によってはすでに名の売れた作家の作品にも編集の立場で接してきただろう。多くの小説に接して小説というものが何なのか、自分なりに確立したものがあるだろう。所謂売れる小説のノウハウのようなものを獲得しているだろう。そこで、これまでに経験した悩みや葛藤を原稿用紙に叩きつけるんだよ。きっといい作品が出来るとボクは思う。編集者が小説を書いてどこが悪い？」

村瀬の顔が輝いたように見えた。誰にも頼ることなく、苦境を自分で切り開く道筋を見出すキッカケになるような気がした。確かに小説家の道は甘くはない。だが好きで入った出版社で思いどおりに本を作る職に恵まれたのだ。突き進めばいい。名誉や金のためではない。誰にも認められなくても好きなことを夢中でやり遂げることに価値がある。人生の価値とはそんなところにある。小説を書くこと自体は初めての挑戦だろうが、一般の人に比較したらすでにどっぷりと小説の世界に浸っている。彼はきっとやってくれるだろう。ボクはそう確信した。

それから一年が経った。村瀬が小説を書く気になった時点から早くも一年だ。突然、村瀬から会ってくれと電話があった。

「三井君、忙しいところを悪いが、時間を作ってくれないか。助けてもらいたいことがある」

嫌な予感がしたから言ってやった。

「金の貸し借りはダメだぞ。金銭貸借が友情を壊す端緒になるというからな。金を貸して催促を始めると確実に友情は壊れる、と西諺にもある」

「いや、そんなんじゃない。ともかく会った後で話す」

小説が書けない泣き言かもしれないと思ったが、ともかく会うことにした。

しばらく振りで見た村瀬はさらに老けて見えた。かなり苦労をしている証拠だ。

「ライバルの出版社がＡＩで書いた小説を出版するという噂を聞いたんだ」

と開口一番に言った。正直驚いた。ＡＩが小説を書けるはずがないと確信していたからだ。

「噂によると、その出版社はＡＩに大まかな筋書だけを与

えて小説を書かせてみたらしい。するとある程度の出来栄えになったというんだ。ただまだ出版できるレベルではないがね。しかしいずれそのレベルになるだろう。としたら脅威だ。それに今の世の中、スピードだ。とにかく次々に出版する方が勝ちだ。ＡＩのスピードは人間の比ではない。次々筋書を与えてやればおもしろい小説がどんどん出来てしまう。オレのような人間が数年かけて書いているうちに何作も出版されたらとてもじゃないが、ウチの出版社は間違いなく潰れる」

ボクは思った。

（ボクの仕事は相変わらず順調でその後新たな論文を長短合わせて数本書いたし、それぞれ一定の評価を受けている。ＡＩの技術も日進月歩のスピードで進化を遂げている。確かに、一年前、ＡＩで小説を書くなんて無理と思っていたのだが、親しいアメリカの研究者から聞いた話ではどうやら実現の可能性もあるらしい。ＡＩ研究者のボクでさえ、予測さえ出来なかったことが実現しようとしている。

この調子でいくと人間でなければできないと思われていた仕事がＡＩにどんどん奪われる事態にもなりかねない。少なくとも単純なルーチン作業はＡＩのものになりつつあるし、とくに危険な作業はすでにＡＩの得意とする分野になっている。今度は小説か。小説まで可能ということになるとＡＩの自動進化まで始まっているということか。恐ろしい事態だ）

「それで、ボクにどうしろと言うんだ？」

「ライバル会社に負けるわけに行かない。ウチの会社を助けてくれないか？」

そういうことなら助けないわけにいかない、とボクは思った。すでにその可能性が出てきた以上、放置していたら科学者としての努力を放棄することと同じだ。

「わかった。こうなったら全力で村瀬の会社を助ける」

「ありがとう。勿論、社としてそれなりの給料は支払うよ」

「給料は要らない。そんなことよりボクが懸念するのは世の中、ますますつまらないものになっていくということだよ。人間の感情表現もアルゴリズムで創り出せるということになるわけだから、情緒もへったくれもない。愛も悲しみも同情の涙も正義の怒りも、その他本来の人間が自然に生み出す感情が〇と一の世界に置き換えられて表現されて

しまうんだ。科学者のボクから見ても空恐ろしいよ。と言って、放置したら必ず誰か別の人間がやる。だから自らがやらないわけにいかない。このようにして人間は必然的に自壊に向かって進んでいくんだろうな。悲しいがこれが現実だ」

「三井君、あまり悲観的なことを言うなよ。人間はＡＩに負けないよ。第一、ＡＩは人間の産物だよ。危なくなったら、最後は破壊すればいい」

「ボクもそうすればいいと思う。だが、だいぶ前に未来を予見した『ターミネーター』という映画があっただろ、コンピュータロボットに戦争を仕掛けられ、人間世界を破壊する動きに出て来るという内容だった。結構、当たっているかもしれない。科学技術が進み、コンピュータで何でもできるようになると人間の力で阻止できない世界が出現する。ま、開き直って考えれば、これが人間の宿命なのかもしれないな」

「困ったな。ＡＩ研究を業とする三井君がそんなことを断言するとは」

「ともかく、ＡＩに小説を書かせる研究は進めるよ。そうしないとライバルに負けると言われては、ボクとしてもやらないわけにいかない。だけど、読者はＡＩが書いた小説とわかった時点で小説に魅力を感じなくなるかもしれないな」

（了）

そよのババアの空中サロン

―その七　私という存在―

中川　とら

高校生になったら、なんだかあっという間に一日が終わる。これといって、大したことをしている訳でもないのに。

ここのところ、むし暑さがこたえるなーと感じ始めたら、夏休みが始まっていた。

近ごろ、そよのババアは一階の静子さんと地域の健康体操にえらく熱心に通っている。二人共、老いて衰えいく体力に必死で抗っているという感じだ。それに習い事もしているらしく、「最近どう？」とスマホで連絡をとろうものなら決まって、「今日は〇〇があってね。明日は午前中体操、午後はコミュニティーセンターで〇〇教室なの」と分刻みのスケジュール。二人は顔を合わせれば、「ともかくあなた、外にでないとね！　家にばかりいたら確実にぼけますわ」と確認し合っているらしい。

わたしの心の友のそらさんは、この春、知る人ぞ知る有名公立高校へ進学した。

相変わらず家には、いまも学校に行けず部屋にこもりがちの妹と、体調が悪いお母さんがいる。単身赴任のお父さんは

まだ戻ってこない。だけど、そらさんの落ち込んでいる様子は伝わってこない。
高校生になって二度ほど会ったけれど、聡明に輝く瞳は少しも変わっていなかった。
アルバイトをしながらの高校生活なのに、彼女の読書量はスゴイ！
物事の捕らえ方も正確で、自分の考えをもっているのには驚く。発想には説得力があって、何より言葉の豊かさに圧倒される。といって、人を見下すなどというところは少しもなく、馬鹿なわたしの話に「おかしいわね！」と拍手しながら笑うのだ。本当に、立派な人を友人にしたと素直に感謝したくなる。

わたしは最近、自分という人間がわからない。
もう少し利口になりたいと思うのだけれど、自分自身がよく分かってないのだから、どうしようもない。一体わたしは、前進しているのか後退しているのか。
この間、母が「あなた、変わったわね。なに、その鼻先で笑う笑い方」と言った。
「そうかしら？」と応えたら、母のとどめは「まるで、さめている感じよ」だった。
少しイラッとして、「大成長の前の休眠のようなものよ！」と言い返したけれど、ひょっとして、感受性が鈍くなったかもと思いながら、どこかの誰かの「ボーと生きているんじゃないよ！」を思い出し、可笑しくなった。

「お盆休み前に、そらさんを誘って遊びに来ない？」
八月最初の土曜日に、ばばあから珍しく連絡が入った。
なんでも、一階の静子さんがスーパーのくじ引きで、花火のセットを当てたらしい。お孫さんがいない静子さんの家には、お客様もめったに来ないから、景品を大事にしまい込んでカビさせてしまうのが、関の山。勿体ないので、和音ちゃん達と庭でささやかな花火大会をしたいと言ってきたのだそうだ。
「せっかくだから夕飯をごちそうするわ。みんなでいただきましょう。」とばばあはおまけも付けてくれた。勿論わたしは二つ返事で快諾。そらさんも「久しぶり！　うれしい！」と、とても喜んでくれた。

その日の夕刻、世代の違う四人は、女の子になった気分ではしゃいだ。
わたしは、はるかに年の離れたバアバの友人を「靜子さん、靜子さん」と呼びながら、マンション一階角の小さな庭に水の入ったバケツを用意し、そらさんと手際よく準備を始めた。
スーパーの袋を開け、「どれからにする？　線香花火は最後にやらない？　だって情緒があるじゃん、賛成よ！」と話ははずむ。
陽が落ちて、それぞれが自分のお気に入りを手にし、火を付けてもらうのを子供のように待った。
そらさんのマッチの火が花火の先端を捜しながら近づく。点火完了！
パチパチとかすかな音をたて始めたかと思いきや一筋の白い煙がすーっと暗い庭に４本立ち上がった。
ここからが本番だ。
シュー、パチパチ、ボワッ、ドキドキするような音と共に青、赤、橙の火の花が一斉に吹き出し点滅し始めた。
勢いはいや増し、火薬のにおいが立ち込めた庭先に歓声がわく。白い煙は闇夜のもやのようで、その中に花火を持つ人の手元と頬だけが、まるで提灯あかりのようにともっている。
もう一本、もう一本。しかし、刹那のイベントは後を引きながら、アッという間にジ・エンドを迎える。
みんな最後に「あ〜あ、もう終わり」と言った。

「かたずけが済んだら、靜子さんとそらさんを誘って上へあがって来てね」
わたしにそう言って、バアバは一足先に自分の部屋へ帰った。

楽しみにしていた夕飯のメニューは、冷やし中華ソバだった。タレがバアバ特製で、何をどう工夫しているのか分からないけど、とにかく美味しい。
「そよのさんの冷やし中華は、格別なのよ」
靜子さんは、そらさんの耳もとに口を寄せてささやいた。
「帰りが遅くなるといけないから、さあさあ早く召し上がれ」
「いただきまーす」
ズーズーと麺を吸い込む音が部屋中に響いて、小気味いい。
「メチャクチャ、美味しい！」

「ほんとに、美味しいわ！」
「それはよかった。きっとお腹がすいているせいよ。ふふふ」
四人は笑いながら、ごちそうをあっという間にたいらげてしまった。ついさっきまで花火に興奮していたことなどすっかり忘れている。
デザートのスィーツは甘く冷たい小豆白玉だ。
幸せは絶好調で、スプーンを口に運ぶたび、顔を見合わせ、わたし達は含み笑いした。
「何だか、若草物語みたいです」とそらさんが言った。
「それにしては、随分と年の離れた姉妹だこと！」
「読まれましたか？」
「ええ。オルコットの作品でしょう？」
隣合って座った静子さんとそらさんのやりとりが楽しそうにはずむ。わたしが目にする初めての光景だ。
しかし、この二人の他愛ないやりとりが、その後わたし達のだんらんに意外な展開をもたらせてくれることになるのだ。
「静子さんは文学少女だったのよ」
そよのバアバが、お茶を入れながら言った。
「そうですか！」
そらさんが目を丸くして静子さんをじっと見る。
「いやいや、遠い音のこと。恥ずかしいわ」
そう返しながら、静子さんは下を向いてしまった。それからつかの間、四人はかつて読んだ作品の中から印象深い作家を思い出して言い始めた。ストウ婦人、モンゴメリー、アンデルセン、スティーブンソン、ワイルド、宮沢賢治、芥川……。
名作は世代を超えてもなお、確かに私達の心を震わせるものであったことを実感し、今また読後の感動が甦ってくる。
「即興詩をつくりませんか」
突然の提案者はそらさんだった。が、三人はだまっている。
「大丈夫です。簡単ですよ。わたしが最初の文をつくりますから、その後を、静子さん、そよのバアバ、わたし、和音ちゃんと好きな言葉を続けてください。最後にお二人で一フレーズつくって一区切りです。それをもう一回四人で繰り返し、完成になります。そよのバアバと静子さんは、最後の一節を

事前に打ち合わせしておいて下さい」
「そんな急にできるかしら」と静子さんは不安気だ。
「やってみましょうよ」
バアバが目を輝かせ二人の背中を押した。
「それではいきます」とそらさんが落ち着いた声で始めた。

夜更けて美しきは、
闇夜の花火
かぐや姫
人知れず努力する人
わたくしという存在
わたし達は、最後まで自分の足で歩きたい
自分の足で歩きたい

しののめに胸ときめくは
朝露の一滴
はじまりの色
深呼吸してこみ上げる希望
成長したいと願う一歩

わたし達は、最後まで自分の足で歩きたい
自分の足で歩きたい

「できた！　いいじゃない！」
緊張から解放された得も言えぬ達成感の中で、四人は手を取りながら互いを讃え合った。
「久しぶりに女学生の気分よ！」
みんな、膝をくずし満足げに笑った。
「大変、こんな時間よ！　二人共早く帰らなくちゃ！」
バアバ達に、追い出されるようにしてそらさんとわたしは外に出た。
「気をつけてね」
静子さんが駆け寄り、そらさんの肩にそっと手をかけた。優しさに満ちた眼差し。それは、まちがいなく人が誰かに愛情を寄せている時の表情だ。
「はい、今日は本当に楽しかったです。花火ありがとうございました。」
そらさんの礼儀正しいあいさつに、わたしも慌ててお礼を言った。

おわり

新しき村　紀行Ⅱ

―毛呂山に夢を移して―

唐瀬　光

今年も三月に入ってわずかに春めいて来た土曜日の朝、私は会社の休日を利用して、埼玉県の毛呂山（もろやま）町に出かけた。

まず新松戸から東京郊外を遠巻きに走る武蔵野線に乗り、埼玉県の武蔵浦和で、川越行きの埼京線に乗り換える。

（おおっ、寒っ……）

武蔵浦和駅のプラットホームに降りたとたん、ひんやりとした空気が頬を撫でるように吹き抜けて行く。

海沿いの千葉と違って、空っ風の吹く、ここ関東平野の中央部では、まだ冬の気候が続いている。私の住んでいる船橋とは、2℃ほど気温が低いのではないだろうか。

埼京線から川越線に乗り継ぎ、高麗川（こまがわ）方面に向かう。ここまでは順調。勝手知った道だ。以前、勤めていた会社の工場が、ここ日高市にあるので、この近辺はよく知っている。だが、今日の目的地、毛呂山町には足を踏み入れたことがない。

隣町なのに通勤圏が違えば訪れたこともない。日常生活

とはそんなものだ。もちろん、そこに武者小路実篤がつくった『新しき村』があるなどとは、定年を過ぎるまで、まったく知らなかった。

それに気づいたのは、つい一年前。私の生まれ故郷、宮崎県児湯(こゆ)郡の実家に帰省した折り、同じ郡内の木城(きじょう)町に今も残っている、実篤が最初に開いた『日向新しき村』を見学してからのことだ。

それ以来、新しき村に興味がわき、四十数年前、学生時代に読んだ武者小路実篤の文学書などを、図書館から借りて再び読み始めた。『友情』『愛と死』『幸福者』などは、若い頃読んだ通り、とても面白く、読後もさわやかな気分に浸れた。

だが当時難しくて（いや、今でも難しいが）理解できなかった『人生論』なども、読み返すうちに、かなりわかるようになって来た。やはり私自身、いろいろな経験を積みながら年輪を重ねて来たせいだろうか。

実篤はこれらの書物に書かれている理想郷を、この世界に実現すべく、宮崎県の木城と、埼玉県の毛呂山に『新しき村』をつくったのだろう。

高麗川駅で八高線のホームまで歩き、高崎方面の電車を待つ。この線は一時間に一本しか来ない。おまけに単線。首都への通勤圏にありながら、利用客の少ないのに驚かされた。

待つこと四十五分。やっと来た電車は二両編成で、車掌のいないワンマン。自分でボタンを押し、ドアを開けて車内に入る。

ゴトゴトと車両が動き出す。私は右側の席に座り、窓の下を眺めていた。地図によれば、毛呂山の新しき村は線路のすぐ右隣に位置する。この窓から見えるはずだ。

車窓に映るのは、のどかな田舎の風景だが、ところどころ新しい造りの住宅が立ち並んでいる。この辺りにも、新興住宅街があちこちに出来ているらしい。

やがて電車は、木々の立ち並ぶ緑豊かな田園の上に差しかかった。

（ここか……）

目を凝らして眺めていると、田畑の中に黄色い電車が置

いてあった。私が初めて上京した時に乗った路面電車に似ている。

（間違いない。あれは都電だ！）

昔、新しき村に都電の廃車を寄付した人がいたと本に書いてあった。その車両は村の幼児たちが通う幼稚園に使われたという。

今から半世紀前、一九六〇年代から七〇年代は村の最盛期で、村内の住民は六十人前後。園児も二十数人いたというから、かなり賑わっていたのだろう。

それが平成最後の年に住んでいる村民は八人。それも高齢化により、次第に働けなくなっている。

もちろん幼児は一人もおらず、都電の『仲良し幼稚園』は一九八四年に閉鎖されていた。

単線の鉄路をゴトゴト走る車両は、やがて薄暗い林の中に入って行く。右手の方に目を凝らしていると、一瞬だが、木々の間に道が開け、その向こうに村落のような所が見えた。だが、車窓はすぐ薄暗い林に閉ざされる。

やがて、林を抜けた電車は、緑映える田園地帯から、また市街の中に入って行く。やがて毛呂（もろ）駅に着いた。赤瓦で屋根を葺いた、いかにも田舎の駅舎という感じで、とても首都圏の通勤圏にあるとは思えない。

駅舎を出ると、青いバックを肩に、南に向かってテクテク歩く。現代的なビルの立ち並ぶ埼玉医科大の前を通り、県道三十号線をひたすら高麗川方面に下る。

新しき村のある葛貫（つづらぬき）は、ちょうど毛呂駅と高麗川駅の中間地帯にあるので、歩いて行くのはかなりしんどかった。村へ行くにはＪＲばかりでなく、近くに東武生越（とうぶおごせ）線が走っており、そこの武州長瀬（ぶしゅうながせ）駅からの歩いた方が近いのだが、それだと村の裏口から入ることになり、正門に立っている二本の門柱を最初に拝めない。

やはり正門から入るべく、車の行き交う県道をひたすら南に下る。

三十分、いや四十分は歩いただろうか、ようやく道の脇に新しき村へ行く標識が見えた。そこをトコトコ曲がると、鉄道の踏切があった。さっき電車から見えた林の切れ間だ。周囲の杉林がそこだけ開け、村に行く道が通っている。

踏切を渡って村の中に入る。林の中をちょっと歩いて行くと、道の両脇に赤紫色の細い門柱が二本立っていた。

そこには、次のような文字が書いてあった。

【この門に入るものは自己と他人の】

【生命を尊重しなければならない】

いきなり重い命題だ。

【自己と他人】……これは自分と、自分以外の人間という意味だろう。

問題は【生命を尊重しなければならない】の【生命】だ。

（生命とはなんぞや？）

まず、生きて呼吸をしている『肉体』であろう。

次に、心、魂といった目に見えない『精神』のことか。

『人はパンのみにて生くるものにあらず』というイエスの言葉どおり、人間は動物並みに『お腹が満たされればそれでよい』というものではない。食って生きるだけが人生の目的なら、巷に多い自殺なぞ起こりようもない。

あなたは（こんなに苦しむのなら、死んだ方がましだ）と思ったことはありませんか。人間は動物とは違い、肉体だけでなく、目に見えない精神も合わせ持っている。精神のエネルギーが肉体の生存本能を超えれば、簡単に死の壁を突破することもある。

やはり人間というものは、心と体の二重構造になっており、門柱に書いてある【生命】とは、肉体の生命ばかりでなく、心の生命も共に重要なものと言っているのであろう。

人間以外の動物には肉体の生命はあるが、心の生命はない。よし、あっても、その働きは、ほんのわずかなものだろう。犬や猫が、悲嘆のあまり自殺したなどとは、聞いたこともないから。

門柱に【自己と他人の生命を尊重しなければならない】という文言は、新しき村の創始者、武者小路実篤の目指した理想社会、一種の共生社会におけるしきたりを表してい

るのであろう。
『共生社会』
また難しい言葉だ。本で調べたのを要約すると、次のような社会だという。
『男も女も、若者も老人も、すべての人間が互いの人格を認め、支え合い、みんなが生き生きと人生を送れる社会』
一見、共産主義に似ているが『互いの人格を認め合う』というところが、近代の共産主義国家とは決定的に違うところであろう。
レーニンやスターリンのつくった共産主義国家は、成立後、たちまち『赤い貴族』と呼ばれる支配階層に乗っ取られてしまった。
そこでは解放されたはずの人民が、以前より酷い奴隷同様の境遇に落とされた。少しでも異を唱えれば『反革命分子』とかのレッテルを張られ、たちまち強制収容所送りとなる。
そこでは厳しい拷問と洗脳により、本来自由であるべき個人の思考までが歪曲される。洗脳されない者は一生牢獄から出られないか、下手すると処刑されてしまう。
まるで一九四九年に刊行されたイギリスの作家、ジョージ・オーウェルの小説『1984年』そっくりのデストピア社会が出現したのだ。
だが、武者小路実篤の書物を読むと、そのような恐ろしい社会とは完全に乖離し、反対に、個人個人の自由な精神を尊重している。
『君は君　我は我なり　されど仲良き』
この言葉に、実篤の自由な思想が込められているように思う。

門柱の間を通って行くと、青地に赤、黒、白、黄色と色紙のように四角模様のついた一本の旗が、蒼天高くたなびいていた。あれがこの村の旗なのだろう。
同じデザインの模様が、入口付近に建っている家の壁にも、大きく描かれている。なんだかフランスの三色旗を思い出した。
門柱を入った所で、まわりの風景を見まわす。そこここに古い平屋が建っている。
（ここは……）

なんだか懐かしい思いに駆られた。私が生まれ、少年期を過ごした田舎の風景に似ている。いや似ているどころか、あの頃とそっくりだ。まるで時間を何十年も巻き戻したような、のどかな村落が広がっていた。

ただ違うところは、まぶしく輝く太陽光パネルがあちこちに設置されていることだ。パネルの反射光が、静かな田園風景になんとなく違和感を起こさせる。

だが、これが、この村にとって、農業以外の確実な収益源になっているらしい。

ちなみに、ここ毛呂山の新しき村は、一般財団法人の形態をとっており、ここの土地家屋、作業用機器は財団法人の所有する物件。ここに在住する村民はその家屋敷に住み（住居、食事代は無料）、法人所有の田畑を耕して、新しき村に収益をもたらしている。そして各人はその収益の中から、個人費と呼ばれる生活費を支給される。と、そういう構造になっているのだ。

村の中央部を歩いて行くと、平屋建ての美術館があった。庭には緑の芝生が広がり、その中に、古代のギリシア巫女に似た一体のブロンズ像が立っている。書物には、彫刻家高田博厚（たかたひろあつ）の作品『いのり』と書いてあった。

高田博厚といえば明治三十三年生まれの彫刻家で、高村光太郎像など多くの彫像を創作したが、ここ新しき村にも作品を残しているとは知らなかった。

そのたおやかな女性像を眺めながら、入口のドアを横に滑らせて、美術館の中に入る。

玄関を入った所には初老のご婦人が受付をしていた。彼女から村の歴史、現在の状況を聞き、入館料二百円を払って展示室に入る。

部屋の壁には開村した時の写真や、書画が飾られており、壁際の棚や中央のテーブルには、村の会誌や彫り物などが展示してあった。

その中に『桃栗三年　柿八年　達磨は九年　俺は一生八十九歳誕生日　実篤』という文言が太い毛筆で書かれているのが印象に残った。

達磨太師は壁に向かって座禅を組み、九年かけて悟りを開いたが、自分は不器用だから、一生かけて業を成すとい

う意味であろうか。

美術館を出て村の広場を歩いて行く。すると、縄文時代の竪穴式住居のような三角屋根の小屋が目についた。この村を始めた時に建てたバンガローだと、ネットに出ている。

その先に美術館と同じような平屋造りの生活文化館があった。中に入ってみると、ここにも書画や彫刻等が並んでいる。これらの作品は、この村の住民が創作したものだという。

新しき村では一日の労働時間は六時間。日曜は休み。労働以外の時間は、村民たちの創作活動にあてるとある。ここに展示してある書画、彫刻は、村人たちの創意工夫によるものだろう。来訪者名簿があったので、私もその一行に『唐瀬光』の名前を入れた。

さらに広場を歩いて、田畑の方に下りていくと、作業服に身を包んだ一人の農夫、いや村民らしき人が、しゃがんで畑の草を刈っていた。彼は私が傍を通っても振り向きもせず、黙々と草刈りを続けている。その光景は、農地と人が一体となって、自然の中に溶け込んでいるように見えた。

ちょっと高台になっている村の居住区から、田畑の広がっている場所に下りる。田んぼ脇のあぜ道を歩いて行くと、黄色い車両が目に入った。先ほど八高線の車窓から見た都電に違いない。一九六〇から七〇年代にかけて村が最も発展していた時に、幼稚園として使われた車両だ。草むらの中にありながら、蔦も絡みついておらず、中も綺麗に掃除されている。

この都電の中で、十数人の園児たちが保母さんを囲み、ワアワア騒いでいる光景が脳裏に浮かぶ。

それが創立百周年を迎えた今は、一人の児童もおらず、この村に住んでいる村民もたった八人。それも高齢化して、働ける人は年々少なくなっている。半世紀前は、何十人もの村人がいて、かなりの賑わいを見せていたというのに。

村の中を歩きまわっていると、たくさんの鶏を飼育して

いたであろう、大きな養鶏棟があった。だが今では一羽の鶏も見当たらず、建物は荒れ果てている。かつての活気あふれる姿はどこに行ってしまったのか。

あの都電の幼稚園から巣立っていった園児たちは、今どこにいるのだろう。もうこの村に帰って来ることはないのであろうか。

村の裏手にまわり、住居や公会堂の建っている高台を下りると、一面、田畑の広がる農地に出た。何ヘクタールもの田んぼや畑が、村の周囲を取り巻いている。

ちょっと坂になった所には、ここにも太陽光パネルが張り巡らされていた。この農地と太陽光パネルから上がる収益が村の活動を支えているのであろう。

だが、ひと昔前のような素朴な農村と、ギラギラ光る太陽光パネルは、どうしても、かなりの違和感を覚えた。

それに、田畑のすぐ近くまで押し寄せている現代的な住宅街。なにも手を打たなければ、高齢化が進むこの村は、ほどなく都市化の波に飲み込まれるだろう。

（なにか打つ手はないのか……）

書物やネットには、農業だけでなく、ほかの産業、例えば物流の集配所とか、老人介護施設などをつくったらどうかとか、いろいろな意見があるらしいが、今一つ実行に移せないらしい。

武者小路実篤は、人間の生きる術として、農業を最も崇高な産業としていた。だが時代は変わり『農業は工業である』などの言葉がある通り、食物の生産を自動化された工場で行う試みが始まっている。田畑の土を耕して作物をつくる農業は、将来、消えて行くことになるかも知れない。その時この村は、このままの状態で存続できるのであろうか。

百年前、実篤は人間の住む理想郷として、新しき村をつくった。彼はこの村を世界中に広げて、人が人として生きるのにふさわしい社会を築こうとした。

彼に賛同する仲間たちも同じ思いで、ここに入村したのであろう。

実篤が没して四十三年が経った今でも、彼と仲間たちのつくった新しき村は残っている。だが、その将来は、今いる村民が一人一人この村からいなくなるとともに、先細り

に消えてしまうような気がしてならない。もし実篤がこの世に生き返ってこの状態を見たら、いったい、どう思うであろうか。

田畑の中を一本通る昔ながらの細いあぜ道を、住宅街の方に歩きながら、私は少年の頃過ごした田舎の村落を思い出していた。

貧しいながらも、生き生きとしていたあの頃。夏休みに親の手伝いをしながら田んぼの草取りをしていると、チリンチリンと鈴を鳴らしながら、自転車でアイスキャンデーを売るおじさんがやって来る。そのアイスを食べるのがなによりも楽しみだった。

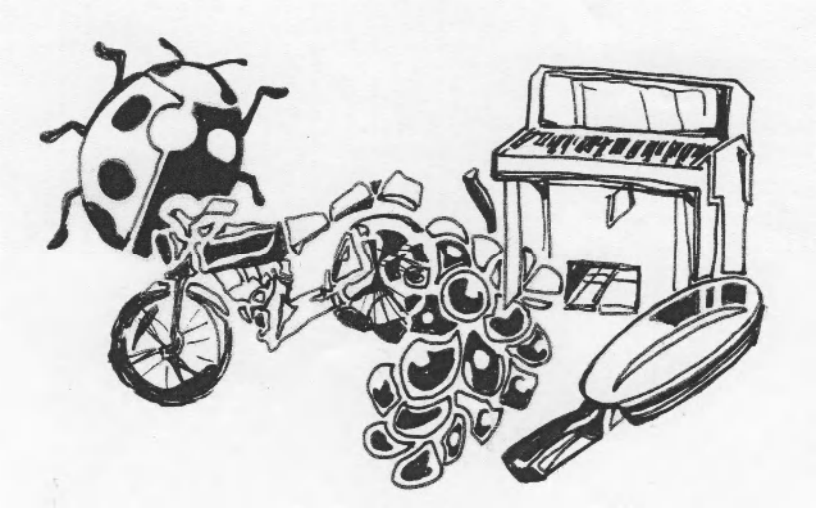
この村は、遠く過ぎ去った私の幼い日々を思い出させくれるオアシスのようなスポット。いつまでも続いてほしいが、そのためにはどうすればよいのか。

歩くこと二十五分。東武線の武州長瀬駅にやって来た。そこはもう賑やかな市街地。同じ地区にこれほど違う社会が併存しているとは、ついこの間まで、思ったこともなかった。

（了）

高齢者の認知機能検査を考える

灰田 隆平



最近、東京池袋の繁華街で８７歳の高齢者がブレーキを踏まず超高速で信号を無視し、青信号で侵入してきたごみ収集車に激突した。最初の信号無視で自転車をなぎ倒し、二つ目の信号で自転車の女性と３歳の子供を跳ねて死亡させたほか、横断歩道を歩いていた人たち４人をなぎ倒した。報道では加害者は霞が関のキャリア官僚出身だという。またも高齢者の惹き起こした事故である。

７５歳以上の者は、自動車免許の更新に関連し、高齢者講習を受けることが義務化されている。さらに昨年、道交法が改正され高齢者講習の前に認知症機能検査の試験を受けることが義務化されたという。

私も免許更新の時期がやって来た。同じ高齢者の一人として心苦しいニュースである。４月のある日、認知症検査の日時が指定され、会場に行くと受講者は８人だった。

顔ぶれは男６人、女２人。「エッ、この人いくつなんだろう。まだ運転してるんだ。どう見ても９０歳近いのでは？」と思われる人がいる。そう思いながら我が身を振り返り、他人からは自分もそう見られる齢になったということかと、愕然とする。

１時間余の簡単な講習とテストがあった。配られた数ページについて講師が説明を始めた。「そこではありません。○○ページです」と何度か注意を促す。指定されたページを開いていない受講者がいたらしい。それも一人だけではないらしい。

「今日は何年何月何日ですか」、「現在は何時何分です。時計文字盤に長い針と短い針で示してください」という質問の後、１６枚の画を見せ、これは何かを声を出させて認識させた。幼稚園児でも答えられる簡単な画ばかりだった。私は声など出すものかと目で追うだけだった。その後、別な説明が始まって数分が過ぎたころ、「先ほど見た画にはどんなものが描かれていたか答えを書いてください」という。「おやおや、全く子供あつかいだな」と思いながら３つほどスラスラと書いたが、「あれ？あの画の次はなんだったかなあ」「まあいいや、あれを飛ばして次の画を書こう」と思ったが、次の画の記憶がなかなか出てこない。焦りながらも「そうだ、あれもあったな」と記憶を呼び戻しやっと書けたのは恥ずかしいかな１６枚のうち９枚の画だけだった。

その次のテストは、例えば「台所用品は？」と問われれば先ほどの画を思い出し「フライパン」と答え、「鳥は？」と問われれば「にわとり」と答える。先ほどの同じ絵をヒントから思い出させる質問だ。そう聞かれると前の問題では答えられなかったものもすべて思い出すことができた。そんなこんなの認知症機能検査が終わった。

若干の休憩の後、審査結果を聞かされた。評価は３段階に別れ、４９点未満の場合は「記憶力・判断力がかなり低くなっています」となり、医師の診断書をもって再度来なければいけないという。次に５０点以上７６点以下だと「記憶力・判断力が低くなっています」となる。指定された高齢者講習は３時間コースである。

ある報道によれば認知症検査により５％近くが４９点未満の３段目となり、４４％近くが次の２段目、「問題なし」と判断される１段目は５１％ほどだという。

試験結果を発表した試験官は「皆さんは全員合格です。この後、指定された日に行われる高齢者講習は全員が２時間のコースでした」と言った。だが、その時は８人いたはずの内

１人が欠けていた。休憩中に係の者から呼ばれ、書類を渡され帰って行ったのをたまたま私は見ていたのである。

私は８４点であった。こんなことでホッとするのも妙だなと思いながらスッキリした気分ではない。今見たばかりの数枚の画の記憶がわずか数分の間で思い出せなかったことがショックだった。皆と一緒に声に出して記憶に留めなかったのは、つまらぬプライドが邪魔をしたためである。自分でも意識はしていたが、高齢化による記憶力の低下に今更ながら驚かされたのである。

ある日のワイドショーで、あの高齢者の運転事故が取り上げられていた。

４０代と思しきコメンテーターが息巻いていう。「ある年齢で免許更新を打ち切るとか、もっと厳しい認知症検査をしなければいけませんョ」と。

被害者の肉親ならずとも、事故に巻き込まれ突然命を落とした人のことを考えると憤りの気持ちをどこにぶつけてよいのか分からないのは皆同じである。

私の住んでいるまちは、商業施設も病院も最近は整ってきたから、生活するのに昔のような不便はない。しかし、有名店に自動車で行くなら１０分程度の距離で不便はないのだが、自分の交通手段を持たなくなった高齢者には「ちょっとそこまで」が大変である。市内を走るバスがあるにはあるが、駅に向かう路線に限られており、大都会のように縦横に走っているわけではない。

私も車を手放すのは何時だろうか、妻とも話し合ったが、時期を明確に決められなかった。

その時期を決めるのは高齢者の自分でしかないと思いながら……。

北条政子の演説

畑中康郎

源頼朝の父・義朝が平治の乱で平清盛に敗れたとき、当然ながら頼朝も斬首の運命を辿るはずだった。ところが清盛の温情により助命され、伊豆の蛭が小島に流された。このことが、その後の歴史を大きく変える転換点となった。

蛭が小島の頼朝。その生活そのものは保証されていたが孤立していた。当然であろう。当時は平家の全盛期で地元の豪族たちは頼朝に近づこうともしなかった。平氏に睨まれれば一族が根絶やしにされる恐れがある。ところが、そんな時世であっても女性は恐れを知らないらしい。有力豪族の娘たちが頼朝をそのままにしておかなかった。頼朝という男は稀に見る美男子だったようで、その接近を拒まなかったということだろう。

初めは伊東祐親の娘である。祐親が大番役（輪番制の京の警護役）のため伊豆を留守にしたとき、頼朝と恋仲になり男子を生んだ。驚いたのは祐親である。とんでもないことになったと、帰宅するとすぐさま幼い男の子を池に沈めて殺し、娘を頼朝から引き離した。そのうえで、別の男のところへ無理やり嫁に出した。これほどに平家の力を恐れたのである。

しかし頼朝はこれに懲りなかった。次は北条時政の娘・政

子と恋仲になった。これも時政が大番役で伊豆を留守にしていたときのことである。帰宅した時政は、祐親と同じように政子を無理やり頼朝から引き離そうとした。そして伊豆を統治する平家の代官・山木兼隆に嫁に出した。が、父親の指図に素直に従う政子ではない。夜半時に婚家を抜け出し、頼朝が籠る伊豆山神社に走った。政子の一方的な駆け落ちである。時政の手の者四十名ほどで追ったが、神社に保護され取り戻すことは出来なかった。神社は治外法権のため手出しができないのである。しかも屈強な僧兵が何百人も陣取っていてはどうにもならない。頼朝と政子は、ついに時政の許しを得て結ばれたのである。

可愛い娘に負け、時政が二人の結婚を認めたということは、平家に対し反旗を翻したということと同意義である。時政は一族の命運を賭け重大な一歩を踏み出したといえる。そこには時政のどんな計算があったのだろうか。わずかな手勢で頼朝方についたところで、圧倒的な戦力を保持する平家の敵ではない。

しかし、時政には時代の潮流を見抜く眼力があった。「平家にあらずんば人にあらず」とまで豪語した平家の横暴は次第に世間から疎まれ始め、平家の味方だった源頼政までも以仁王を擁して反旗を翻すとその不満は一気に爆発し、燎原の火の如く全国に広がっていった。平家の凋落は清盛の死が象徴的だ。歴史の流れとは不思議なもので、あたかも神が計画したかのように今度は源氏の世へと雪崩を打って進行したのだ。

寿永四年（一一八五）、壇ノ浦の戦いで平家が滅び、ついに源氏の世となる。しかしその後も世情はしばらく安定しなかった。頼朝と義経の骨肉の争い、義経を保護したが故の奥州藤原氏の滅亡（勿論、頼朝にとって奥州藤原氏の存在が邪魔だったから、藤原氏打倒の恰好の口実となったとも考えられる）、そして義経の死。これにより世情は落ち着きを取り戻し、建久三年（一一九二）、頼朝が征夷大将軍に任じられ、武士の世の先駆けとなる鎌倉幕府がようやく発足したのである。

しかし幕府が成立した後もその内情は平穏なものでは決してなかった。

北条時政という男を考えるとき、頼朝に天下を取らせるこ

とが目的ではなかった、と私は疑う。野心の塊のような男で、自分が天下を統治するために頼朝の血統と名声を利用したのではないか。しかも世間にそれと疑われることなく緻密に整然とやってのけたのではないかと思う。

まず初代将軍・頼朝の暗殺だ。鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」によれば、頼朝は建久一〇年（一一九九）に落馬事故がもとで死んだことになっている。だが、長く平家との戦闘に時間を費やし歴戦の勇士だった頼朝が落馬したとは素直に信じられない。しかも死の前後、彼は歴史に一切登場していないのだ。つまり時政が頼朝の行動を抑制していたと見えなくもない。多分、天下取りが済んで、時政には頼朝を利用する価値がなくなったのではないか。その死も落馬ではなく、実は、他に原因があったと考える。

因みに頼朝が死んだとき、政子は自分の髪を切り、頼朝の菩提寺に奉納している。政子は頼朝を心より愛しており、したがって時政の陰謀には加担していないと私は推測する。

二代将軍の頼家はどうか。頼家は身勝手な行動を取りがちな性格の上に愛情偏頗で妻の実家である比企氏やその側近を寵愛したので、野心を持つ北条氏が頼家を暗殺する好都合の動機を与えた。実際、北条氏に攻められ殺されている。

三代将軍・実朝については、もともと公家の生活や文化に憧れを抱き、藤原定家に和歌を学び、万葉調の優れた歌人となったくらいの人物だ。武士政権の基盤確立が急務のときに政治よりも和歌や京文化の方を優先させたのである。これが鎌倉武士を失望させ、命を狙われることになったことは自然だろう。このように実朝を仕向けたのも深慮遠謀の時政の為せる業ではなかったか。そのうえ暗殺の方法も際立っている。頼家の子・公暁が将軍職を継げなかったことを怨んで決行したかのように仕組んだのだ。公暁は実朝を斬りつけたとき、「我こそは公暁なり」と叫んだといわれている。容易に想像できるように暗殺者が自ら名乗るだろうか。しかもその場に居合わせた人々は公暁の顔さえ知らなかったというのだ。公暁はすぐさま捕縛され、十分な取り調べもなく殺された。こうして頼朝につながる直系の子孫は根絶やしにされたことになる。つまり北条の時代になったということだ。

ここで私はこれら一連の暗殺事件の間、彼らの母または祖母の存在である政子は一体どうしていたのか？　これが私の疑問なのである。血肉を分けた息子たちが殺されるのをた

だ黙って見ていたのか、結論からいえば私は見ていたと思う。頼朝の死後、後継者となる頼家と実朝の資質を見抜き、彼らが将軍になった場合、幕府の存在そのものが危うくなる、つまり北条氏そのものが存続できなくなる不安を覚えたのではないか。彼女にとってはせっかく頼朝と苦労して作り上げた幕府が時短く滅び去るのをただ見ている訳にはいかなかったのではないか。その証拠に父・時政が後妻の「牧の方」のいいなりになって、義理の娘婿「平賀朝雅」を将軍にしたいと言い出したとき、北条の幕府がなくなることを怖れ、政子は弟の「義時」と謀って時政を伊豆に幽閉し、平賀を殺したのだ。

その時点で政子にとって頼るべき肉親は義時ただひとりとなった。義時こそ、政子の期待に十分応えられる政治家としての資質を持っていた。

建久三年（一二二一）、京の後鳥羽上皇は鎌倉幕府にとんでもない要求を出した。内紛が続き混乱している幕府の足元を見たのだ。政権を取り戻す好機と見たに違いない。義時を人質として差し出せというのだ。狙いは明らかだった。幕府を支える中心人物の義時がいなくなれば、自然と幕府は求心力を失って瓦解すると読んだのである。

政子は重大な危機と認識した。これを拒めば、朝廷との戦になる。しかし歴史上、京の朝廷に弓を引いた者などいない。前代未聞なのである。といって、上皇の申し出を受け入れれば、せっかくここまで夫・頼朝と命を賭けて築いてきた幕府を失うことになる。選択肢は他になかった。朝廷と戦うしかなかったのである。だが、幕府に味方してくれる豪族が何人いるだろうか？

ここからが尼将軍と言われた政子の真骨頂だ。彼女は頼朝の死後、混乱した幕府にあって、その屋台骨を支えた陰の将軍だった。その彼女が豪族たちを集めて最後の訴えに出たのだ。有名な「北条政子の演説」である。

冒頭、彼女はこう切り出した。

「これは私の最後になるであろう、重要な演説である」

聞いた豪族たちは一様に緊張した。無駄口をきかない陰の実力者がいったのである。そこに重みのないはずがない。彼女は、しばらく置いてから続けた。

「もしも朝廷の要求を受け入れれば、これまでせっかく築い

た武士の世を元に戻してしまうことになる。思い出してもらいたい。皆さんは大番役として何度も京に出向き、額を地面につけ貴族たちから受ける屈辱に耐え、京の警護に交代で当たってきた。その辛さを思い出してほしいのです。そんな苦役から解放してくれたのは頼朝公その人ではありませんか。

苦労して土地を開墾しても日本全国の土地は天皇家や貴族たちのものになってしまった。それを開墾した者の所有に認めさせたのも頼朝公ではありませんか。皆さんは、元の苦難の時代に戻ってもいいとはお考えにならないでしょう」

ここまで具体的に苦労した時代のことをいわれると、天皇家に弓を引くことの恐ろしさなどいつしか吹き飛んだ。人は自分の利害と無縁には行動できないのである。

集まった豪族たちの衆議は一決した。朝廷と一戦を交えることになったのだ。政子はさらに議論を進めた。

もしも一戦を交えるところまでで議論を終えてしまったなら、時間の経過とともに、豪族たちの一気に高まった気持ちも萎えることがわかっていた。人の気持ちは時間と共に変化するのである。天皇家に弓を引くことの懸念が潜在的にあるからなおさらなのだ。

彼女は一気にたたみかけた。具合的な戦略戦術に即座に踏み込んだ。

「朝廷と一線を交えることに衆議一決した。それでは、戦場をどこにするかについて問題にしよう」

これにはさまざまな意見が出た。箱根の山で迎え撃とうという意見もあった。鎌倉は天然の要害、鎌倉で一戦を交えればいい。それまで時間をかせぎ、準備を万端としたうえで戦に臨めばいいとの意見もあった。議論百出となった。

政子はしばらく沈黙を守っていたが、議論が一段落し皆が沈黙した時、ようやく言葉を発した。

「京を決戦の場としよう。おそらく上皇側はわれわれ幕府軍が攻め込んでくるとは決して思っていない。戦う意思も持てないとさえ、高を括っているかもしれない。だからこそ、逆手を取って攻め込むのだ。そうすれば勝機はわが軍に必ず訪れる」

皆の気持ちはこの言葉で一層高まった。待つことは毒なのである。待っているうちに人の心は変わる。時間を置いてはいけないのである。こうして京に攻め込むことで一決した。

戦いの先頭に立ったのは義時である。一刻の躊躇もなかっ

た。義時は京に攻め込むことが決まってから時間を置かず、京へと進発した。わずか十九騎を伴っただけだった。それが進軍するにつれ軍勢は膨らみ、京に入る頃には、二十万の大軍になった。これこそが武士の世を確立させた「承久の乱」である。

この戦いの結末は歴史に明らかだ。幕府側の圧勝に終わり、後鳥羽上皇は隠岐に島流しとなった。そして北条家は幕府の実権を握る「執権」の地位を確立した。

北条政子という女性は、イギリスのマーガレット・サッチャーに比肩する存在と私は思う。世界史上でも指折りの政治家といっていいだろう。世間は様々な人間が勝手な意見を述べ、勝手な行動を取る。したがって刻一刻と情勢は変化する。それを巧みに察知して状況を捉え、将来を見据えたうえでその時点における最高最良の決断をする。それが優れた政治家に求められる資質であり行動である。

北条政子にはそれが出来た。後鳥羽上皇が要求したことは、北条義時を人質として差し出すことだけだった。表面上はそれだけだった。それ以外は何も要求していない。だから上皇の求めに従えば、戦争をする必要はないと思われた。将来は見通せないものの、幕府は当面、安泰なのである。

だが、夫や息子、孫まで失った政子にとって、義時だけが如何なる相談もできる唯一の頼りになる肉親だった。その彼を朝廷に差し出せば、将来、北条氏の幕府がなくなることは容易に想像できる。それは到底許せない。そこで政子は義時を演説の場に出さなかった。出せば、何か喋らなくてはいけなくなるし、喋れば事象が義時の問題として表面化する。

政子は論理のすり替えを行ったのだ。義時の問題を武士の世がなくなるという問題にすり替えたのである。豪族たちは、一様に武士の世がなくなることを嫌い、それでは困ると思っていた。そこを見抜いたことが政子の卓越した資質なのである。

こうして、鎌倉幕府は存続し、武士の世が江戸時代の末まで続くことになった。

因みに、「承久の乱」から四年後、政子は満年齢六十八歳でこの世を去った。歴史に偉大な足跡を残した人物だった。

〈了〉

松虫姫伝説とその小説

香取　淳

印西市に移り住んで早や十五年。定年が近づき、既に住処を確保していた東北のＳ市に戻るか、それとも友人・知人が多い首都圏に残るか、思い悩んで選択した棲家（すみか）がニュータウン中央である。

その終（つい）の棲家を決めるために一都三県十数ヵ所に足を運んだが、最初に見た現在の場所が群を抜いて優れていた。先ず首都圏とは思えない豊かな緑地や水辺。そして広大な敷地に、余裕をもって計画された道路や家並み。

迷うことなくこの町に住むことを決めたが、周辺は見渡す限りの草原と森林。その光景に、恐らく以前は人が滅多に立ち入らない未開の地であったに違いない……と思い込んでいた。しかし、少し時間が経って知ることとなったのだが、この地には太古の昔から多様な人々が住み、多くの歴史が残されているようである。

この地の歴史に興味を持ったきっかけは、「住みよさランキング」で印西市が日本一になったことであった。民間の一調査会社のデータではあっても、余多ある都市の頂点に

立つことは容易なことではなく、しかもその地位が七年ものあいだ持続しているのである。

では何故、住みやすくなったのであろうか？　そう疑問を抱いて調べてみると、大きな失敗が幾つも積み重なって到来した「好ましい結果」ということになる。巨大なニュータウン計画の挫折・失敗が、今になって開花したと言わざるを得ない。

ニュータウンの当初の計画では人口三四万人、都心と成田空港を結ぶ鉄道と高速道路、さらには成田新幹線の構想まであった。しかし、それらの構想はバブル経済の崩壊と共に殆どが失敗に帰し、開発に当たったURはニュータウン計画においては巨大な赤字を残して撤退していった。

そして今、整ったインフラとたっぷり余裕（ゆとり）のある住宅地に若い世代が集まってきて、勤労者人口は年々増加。その結果として市の財政も潤い、ほかの地方都市では考えられないような発展を遂げている……、と言えないであろうか。

千葉ニュータウン計画の全貌を調べていると、第二次大戦前後の歴史が浮かび上がってくる。牧之原とその周辺地域はかつて飛行場であり、パイロットの養成所や短い期間ではあったが陸軍の首都防衛部隊が置かれていた。そして戦後は、その養成所や軍の施設が少年院として利用されている。

さらに歴史を遡ると、幕府直轄の「印西牧」という野馬を育てる牧場であった時期がある。今でも木刈の東に「牧の木戸」という町名が残っているが、これは牧場の入り口を表しているという。

また、江戸時代の大きな出来事として、利根川の劇的な変化、さらに「香取の海」という内海が消失して、現在の谷津の多い地形に変貌したことは特筆すべきことであろう。

さらに先史を紐解けば、この地域に「竜腹寺伝説」が登場する。実際に竜腹寺という寺があるし、地名としても残っている。しかし、この伝説は鎌倉から足利時代にこの地を支配していた千葉氏が、懇意にしていた延命院という寺の格上げを狙って広めた「作り話」であろう……といわれている。

印西の歴史をさらに遡ると、「松虫姫伝説」に辿り着く。この伝説に関わる松虫寺は、北総線の印旛日本医大の駅近くにあり、生い茂る古木や竹藪の中にひっそりと建っている。この伝説は周知のように、聖武天皇の皇女松虫姫が不治の業病として忌み嫌われた籟（らい）を患ったことから始まる。

ある夜、下総に効験あらたかな薬師如来があるという夢のお告げがあり、姫は従者と共に坂東に下向。萩原郷に辿り着くと薬師堂のかたわらに草庵を結び、朝夕一心に祈り続けた。彼女の願いは御仏に通じて業病は跡形もなく平癒、乳母の杉自を萩原郷に残して都に帰還する。

この話を聞いた聖武天皇は、東大寺を建立した行基に命じて「七仏薬師」を刻み一寺を建立、姫の名をとって松虫寺と名付け、地名にも残した。姫に同行した乳母の「杉自」は高齢のため現地に留まり、姫を乗せてきた牛も姫との別れを嘆き悲しみ近くの池に入水（じゅすい）、それが「牛むぐりの池」であると伝える。

この伝説をすべて鵜呑みすることはできないが、寺の奥には姫の分骨を葬ったという「松虫姫御廟」があり、少し東方の三ツ辻には、「杉自の塚」も祀られている。

どうやら前出の竜腹寺伝説とは違って、松虫姫がこの地にやって来て、不治の病の治癒を願って薬師如来に祈ったという話は史実のように思われてならない……。

このように、印西の地には現在の千葉ニュータウンの姿からは想像もできないような歴史が隠されているようである。そして、これらの歴史を研究する人やサークルも多く、数多くの書物や資料も残されている。しかし、それらは図書館の片隅に置かれていて、そこに収められた郷土史を紐解く人は極めて少ないように思われる。

そこで筆者は、目覚ましく発展する印西とその周辺の歴史を多くの人に知ってもらうためには、過去の出来事の「小説化」が最も早道ではないか……と考えた。そして郷土史の幾つかの頁を繰ってみたが構想が浮かばない。どの時代に焦点を当てるべきか、登場人物やキャラクターはどのように設定すべきか等々。

そのような折に、分厚い一冊の本に遭遇した。図書館の

郷土史のコーナーで、である。その本の題名は「印波(いには)の森〜松虫姫夢譚〜」。著者は花山蛇行。九年前、岩波出版サービスセンターからの発行で、装丁は四六版三七〇ページを超える立派なものである。

書きたくても書けない郷土史に関する小説、それもロマンに満ちた古(いにしえ)の美しい姫の話となれば読まないわけにはいかない。早速借りてきて、むさぼるように読むこととなった。

そのストーリーを、少し長くなるが紹介しよう。

天平十一年(七三九)の初夏、聖武天皇は平城京の東にある高円(たかまど)野に狩りに出かけた。帝の狩猟ということで、周辺の野山は立ち入りが厳しく制限されていたが、突然、栗毛の裸馬に跨った少年が現れた。

「こやつは警護の網をどう潜り抜けて……」と思ううちに、少年は馬を降りて野の花を一輪摘み、その場から立ち去ろうとする。聖武は従者に命じて闖入者(ちんにゅうしゃ)を捕えたが、それはよく見ると真っ黒に日焼けした少女で、耳元に一輪の野花をかざしている。帝は、野に咲く花に心を寄せるあどけない少女に虚を突かれ、何の咎めもなく少女を解き放った。

後日、帝は妙に気に掛かる少女の身辺を調べてみた。彼女の名は「松虫」で歳は十二歳。住まいは現在の天理市にある石上(いそのかみ)神宮より北東の山手。父母はおらず、家族は祖父母のみ。その祖父は物部(もののべ)守屋の流れを汲む者であるという(物部守屋は曽我馬子に敗れて以来、政治の表舞台に出ることはなく冷遇されていた)

さらに調べると、母は彼女を出産した後に他界して祖父母に養育されてきたが、男子に混じって育てられたため剣の心得があり、周りの誰にもひけを取らないほどの腕前。さらに短歌や音楽のたしなみもあるという。

とりわけ帝を驚かせたのは松虫の生まれた日で、神亀五

年（七二八）九月十三日。それは夭折（ようせつ）した「基王（もとい）」の命日と同じであり、帝は「松虫は二歳でこの世を去った基王の生まれ変わりでは……」と思うようになった。

一方、帝は松虫が生まれる前の年に甕原離宮（みかのはら）（後の恭仁宮＝木津川市）に出掛けたが、その折に夜伽（よとぎ）に供された女が松虫の母親ではないか……という話を耳にする。松虫の母はその頃は独り身で、離宮に出仕していたこともあり、松虫はもしかして帝の落し胤（だね）ではないかという噂もあったが、確たる裏付けはない。

そうこうするうちに、「松虫は息子の生まれ変わりに違いない」という思いが募りに募り、帝はある日「松虫を宮に出仕させよ」という命を下した。

松虫は祖父に手を引かれて宮中に参内（さんだい）。彼女を迎えた女官は宮中を一巡した後で聖武に引き合わす。若い女官が帝に面会することは異例であったが、戸惑う松虫を一目見た聖武は顔を綻ばせてからからと哄笑（こうしょう）。それまで聞かれなかった笑い声が内裏に響き渡る。引き続き松虫は皇后にも面会、興福寺の阿修羅によく似た顔立ちは「基王の生まれ変わりに違いない」という思いを皇后にも強く抱かせた。

宮中に入った松虫は仕事の覚えも早く何をやらせても良く出来た。さらに短歌や笛でも類い稀なる腕前を発揮し、帝と皇后の寵愛を受けながら成長してゆく。

その彼女が宮中を出る機会はなかったが、皇后が熱心に取り組んでいた慈善事業のときだけは外出が許された。内裏に近い「悲田院」や「施薬院」には数多くの生活困窮者や病人集まってくる。皇后は、彼らの救済や治療に当たっていたが、松虫はそれらの事業をよく手伝うようになっていた。

ある時、松虫は悲田院に運び込まれた瀕死の少年を見つけた。それはサルと呼ばれる盗人で、人殺しもしかねない極悪人であった。しかし、松虫は周囲の反対を押し切り、

少年を手厚く看病する。元気を取り戻した少年は松虫を命の恩人と慕い、心を入れ替える。松虫も世間から嫌われていた少年を受け容れ、以後、「佐留」と呼ぶようになる（少年の顔貌は、猿というより牛に似ていた）。

松虫が十四歳になった時、不治の病として恐れ忌み嫌われる籟（らい）病の症状が左手に現れた。多くの病人に接してきた松虫は、自分が不治の病に罹ったことにすぐ気付いて、薬師に診て貰う。結果はやはり不治の病。薬師の看立てを直属の女官に伝え、彼女は石上の実家に戻って宮中からの沙汰を待った。

一部始終を知らされた帝と皇后は対応に困った。皇后は藤原の出であったが、お気に入りであった甥の藤原仲麻呂に相談、松虫姫の処遇をすべて彼に任せることにした。

この時、松虫は夢を見る。「坂東の下総の地に有難い薬師仏があり、その薬師仏に祈れば病は治癒する」というお告げであった。

その話を耳にした皇后は、「夢のお告げを叶えてやる形で姫の処遇を……」と仲麻呂に伝える。指示を受けた仲麻呂は、松虫姫を捨てる先として藤原の勢力下にあって親交のある香取社か鹿島社の宮司のことを思い浮かべる。そして、「人目を避けて、しかも都からの目が行き届く地」として、常陸より下総の方がよかろうと姫を香取神宮に預けることにした。（香取社と鹿島社は藤原との繋がりが強く、成り上がりの藤原家のルーツ作りに利用されたようで、春日大社の鹿も鹿島神宮から運ばれたもの）

都より依頼を受けた香取神宮は姫の受け入れを了承、受け入れ先は「印波郡萩原郷出戸（いにはなこほり）」との連絡が仲麻呂のもとに届く。

行き先が決まった松虫姫の旅程は、人目に付きやすい陸路は避けて海路を選択。さらに海路の表玄関である難波を止めて、逆方向の伊勢路に出る。伊勢から先は海岸に出て、磯伝いに小舟を取り替え、下総まで行くルートである。

従者もまた人目に付かぬようにと四人に絞り込む。乳母の真刀自（まとじ）（伝説では杉自）、東国出身の護衛役忍羽（おしば）と身の回りの世話役徳足（とこたり）の三人に自ら願い出た佐留。松虫姫の旅装

は身軽な武者姿で、乳母の真刀自が菅傘に壺装束。いざというときには姫の身代わりになろうとしていた。

坂東に旅発つ日、松虫は恭仁宮（くにのみや）に帝と皇后を訪ね、別れの挨拶をする。十四歳になった凛々しい武者姿に、帝はそれまで受け容れがたかった『松虫がかつてこの離宮で抱いた女の落し胤（だね）』であることを確信した。

伊勢に向けて旅立って間もなく、名張市の安保（あぼ）に差し掛かった一行は山賊に襲われる。賊は四人で、サルのかつての盗人仲間であった。護衛の忍羽と改心した佐留の活躍で瞬く間に賊を撃退。しかし、佐留は彼らが諦めることはなく必ず体制を立て直して襲ってくると言う。

翌日は強い雨が降り、昼でも薄暗い山中は極めて危険であった。それでも松虫姫は予定通りに伊勢に向かうと主張する。山中に踏み入って間もなく、仲間を八人に増やした山賊たちが襲い掛かってきた。

先ず一本の矢が忍羽の肩に刺さり、次いで佐留と忍羽に四人が切り込んでくる。男装の姫にも二人の賊が切りつけた。しかし、姫は刀を抜くこともなく敵を泥水にねじ伏せ、さらに奪った棍棒で残りの賊たちを打ちのめす。形勢が悪くなった山賊たちはあたふたと山中に逃げ込むが、姫の卓越した武者ぶりに従者たちはみな目をみはった。

伊勢に着いた一行は磯伝いに舟を進め、浦泊まりを繰り返す。途中で何度も舟を変え、ついに一行は香取神宮の鳥居が建つ「津の宮」に到着。そこで姫たちは小高い丘にある香取神宮を訪ね、香取の海を見渡せる建物に一泊する。

ここで忍羽は任を解かれて帰宅する。彼の家は霞ケ浦の南東にある行方市で、姫の護衛は都での勤めを終えた帰路に命じられた任務であった。

人数が一人減った一行は、香取神宮の禰宜（ねぎ）の案内で津の宮を小舟で出発、波静かな香取の海を西に進み広い入り江に入る。さらに川に沿った葦の間を奥に進み岩場に横付け。急な坂を登ると小さな祠（ほこら）ほどの御堂があった。それは皇后が用意させた薬師堂で、観音開きの扉を開けると奥に一尺

ほどの仏像。その脇には掘っ立て小屋と榾(ほた)が風よけに積まれている。近くには泉が湧き、そこから生活に必要な水を汲み、泉から流れる小川で沐浴(もくよく)もできる。

当座の食糧は香取神宮が用意してあり、「今後も月に一度は暮らしに要るものを届ける……」と言い残して禰宜は立ち去った（食料や生活物資の補給は姫の病状を監視して、都に報告する目的も兼ねていた）。

次の日から松虫姫は薬師仏に祈る日々に入った。観音開きの御堂は人一人が入れる広さで、奥に金箔の剥がれかけた仏像。その仏を夢枕に現れた薬師如来と信じ、姫はひたすら読経と薬師如来の真言を繰り返す。

その間に真刀自たちは生活の場を着々と調え、冬を迎える準備にいそしむ。徳足は薬草の採取や保存法などを佐留に伝授、自分がいなくなっても困らないようにと生活の知恵を授ける。

しかし、姫の祈りの効験はなかなか現れず、瞬く間に一年が過ぎ去った。徳足たちは女だけの小屋を建てて、長丁場になる生活に対応。さらに、畑づくりに必要な農具の制作や、真刀自のために機織(はたおり)機なども作り出す。

一方、松虫姫は結願の時を千日と思い描いて、毎日欠かさず御堂に籠って仏に祈る。外界とは一切関わりのない日々が続いたが、あるとき嵐で一人の漁夫が葦の間に漂着した。姫は、その漁夫「魚嶋」を助けて看病、元気を取り戻した魚嶋を家に帰すが、「ここに姫たちが隠遁(いんとん)していることは誰にも内密に……」と頼み込む。

変化の乏しい祈りの日々は長引き、三度目の春を迎えたときに徳足が突然失踪。行く先は分からないが、恐らく阿見の自宅に逃げ帰ったものと思われる。姫は彼の失踪を責めるより、家族を措いて尽くしてくれた徳足の犠牲の大きさに改めて心を痛めた。

薬師仏に祈りを始めて千日近くが経った。外は雷鳴が轟き、激しい雨が降っていた。姫は何時ものように御堂で祈り続けたが、患部―左手から肩首にかけて―がひどく痛ん

だ。その夜、床に入っても痛みは増すばかりで、気が遠くなるほどである。しかし、隣で眠る真刀自を気遣い、姫は声を出さずに耐えに耐える。

その痛みも明け方近くに幾分和らいで、姫は微睡(まどろ)んだ。しかし、いつもの時間には目を覚まし、泉で沐浴を……と立ち上がったとき、姫は身体の変化に気付いた。

驚くべきことに病魔は消え去って、醜く変形した患部も滑らかである。俄(にわ)かには信じられず、姫は真刀自を起こして全身を隈なく調べて貰うが、不治の病は完治している。ついに、薬師如来への祈りが叶ったのである。

松虫姫の病は治ったが、彼女の帰る場所はなかった。帝は都に呼び戻したいと願うものの周囲は誰も同意しない。とくに皇后の反対は強く、姫の処遇はふたたび藤原仲麻呂に委ねられる。

帝は姫の帰還を断念する代わりに、萩原の地に一寺を建てて、その名と地名を松虫寺とすることを条件に出す。それを聞いた仲麻呂は、行基に寺の建立と「七仏薬師如来」を刻ませた。

人が滅多に近づかない山里に突然立派な寺が建立されたため、人々が大勢集まってきた。しかし、姫の病が全快したという話は、「遠い昔の伝説」として、松虫たちは寺の奥にある小屋に幽閉されていた（香取神宮に代わって松虫寺が姫の監視役になった）。

あるとき、命を救われたことのある漁師の魚嶋が、秘かに寺を訪ねてきた。彼は寺の内諾を得て、姫たちを連れ出して周辺を案内。龍角寺とその周辺にある古墳群は誰のものか？　と魚嶋に問うと、「誰かは分からない。ある時忽然と住む人が姿を消してしまった。恐らく雷(いかずち)に打たれたのであろう（＝藤原の神に討たれた）」と言う。さらに祭神が武神・軍神とされる鹿島神宮を訪問、まだ蝦夷(えみし)が勢力を振るう東国の支配が完結していない当時、香取の海は東国征伐の拠点で、行き来する舟も厳しく監視されていた。

魚嶋に案内されて世の移り変わりを目の当たりにした姫は、寺の奥隅に幽閉された日々と訣別すべく、ある夜更けに佐留とともに松虫寺を出奔。天平十八年（七四六）のことである。その時、年老いた真刀自には、この地に残るようにと言い含めて。

都に辿り着いた姫は、まず石上の祖父母を訪ねたが、すでに他界して面会は叶わない。そこで行基が進める慈善事業の中核をなす菅原寺（現喜光寺）に赴いて慈善事業に身を投じる。名を伏して真っ黒になって働く姫の話は、やがて「女行基」の異名で呼ばれるようになった。

あるとき、皇太后は女行基が近くにいることを聞き、傍に呼び寄せた。空風呂で身体を拭っているうちに、彼女は松虫姫であることが判明。皇太后は余命わずかとなった聖武に姫を引き合わせる。涙を流して再会を喜ぶ聖武に、松虫は聖武が自分の本当の父であることを実感した。

松虫はその後も引き続き慈善事業に身を投じたが、四七歳のとき、旅の途中で病に倒れたという。松虫寺にそのいきさつを申し出て、牛によく似た顔貌の男が遺髪を差し出す。対応に出た僧は、遺髪を仏壇に供えて経を唱え、供養の振りをする。その見知らぬ男が立ち去って暫く経つと、寺は他の供物と共に遺髪をゴミ捨て場に処分した。

この遺髪を持ってきた男は、寺を訪ねて数日後に近くの池に身を投げる。水死体を発見した人々は男がどこか牛に似ていたため、「善行を積んだ牛が、人に姿を変えたものに違いない」と推測したという。

よくできた興味深いストーリーである。とくに松虫姫を取り巻く時代背景、例えば聖武天皇を取り巻く政敵や当時の世相、後宮における女官たちの暮しぶりなどが詳細に描かれている。地名や当時の言葉も丁寧に解説されていて、「松虫」というのは鈴虫の意であるという。

そのような背景の中で幼い松虫が成長し、やがて下総の地に捨てられる展開は「史実ではないか」と思うほどリアリティがあり、素晴らしい出来栄えだと思う。

その反面、頁から溢れ出るほどの時代背景に加え、場面に即した万葉の歌が数多く引用され、主題のストーリーが埋没しかけている。しかも、始まりの章は松虫姫の伝説を

小説に書くこととなった動機や取材の様子、主な情報源などの話題が綿々と綴られている。

恐らく著者は、「自分が生きてきた証」のような意気込みで書き上げた一冊に違いない。その情熱や卓越した知識はよく伝わってくる。しかし、小説の体をなしていないし、さりとて万葉の時代絵巻のような書物とも言えない。

図書館の「郷土史」の棚に収まった本書を手に取る人は少ないし、たとえ頁を開いても終わりまで読み切る人はごく僅かであろう。そのような見地から、魅力的なストーリーを粗筋で紹介したが、結果として書評なのか、郷土史に関するエッセイなのか、どちらつかずの中途半端な文章となってしまった。

いま、千葉ニュータウンは建設ラッシュで、夥しい数の住宅や物流センター、商業施設などが次々に建てられている。それらの開発が進むたびに、かつての農地、飛行場、牧場等の面影や歴史は消え去って、新たに住む人々に知られることもなくなる。

それでも人々の生活には何ら支障は来たさないし、困ることは何もない。しかし、郷土の歴史を知らない、あるいは無視するということは、先祖を蔑(ないがし)ろにするように寂しいものがある。

激しい変化を遂げてきたこの地の近代史については、私たち世代がしっかり記録に残すべきだと思う。また、江戸時代以降は数多くの記録があるが、誰でもが気軽に読めるような読み物に改訂してはどうであろうか。さらに、中世以前は確たるものが少なく、もっと多くの掘り下げが必要になるのでは……などと齧(かじ)りはじめた郷土史について、他愛もないことを感じている。

【編集後記】

■紫陽花が見頃を迎えているが、『草の丘 第十六号』を予定通り発行する運びとなった。今回は、詩と小説に紀行文とエッセイの構成で、合わせて八編。いずれも熱のこもった作品ではあるが、本誌のコアとなる『小説』の投稿と頁数の少なさが若干気になる。

■喜ばしいこととして、『灰田隆平』が新たに会員となり、短編小説とエッセイを発表した。彼は、郷土の歴史に造詣が深く、単行本や研究論文等も数多い。入会の動機を「史実に縛られない自由なフィクションに魅力を感じる」と話しているが、今後の活躍に期待したい。

■前号の編集後記で、本誌の対象ジャンルを短歌や俳句等に広げる構想を記した。早速、該当する幾つかの団体に声掛けをしてみたが、夫々に発表の場は多く、新たな媒体のニーズは少ないという。その辺の状況について、丁寧な書簡を頂いた『水辺短歌会』の比嘉 清氏に深謝する。

■本誌のように、ＷＥＢを発表の場とする「ネット小説」は隆盛を極め、投稿が六十万編を超えるサイトもある。筆者も二、三のサイトに既発表作を掲載してみたが、『横書き小説』も慣れてくれれば、それなりの良さがあることに気付かされる。紙媒体の文芸誌は衰退の一途を辿っているが、書き手は決して減っている訳ではいない。文芸『草の丘』も地域の文芸誌としてますます発展することを願って止まない。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

いんば 華子 bach.goldberg-variationen@hotmail.com
香取 淳 katorijun27@gmail.com
唐瀬 光 effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp
中川 とら nakagawatora1@gmail.com
灰田隆平 g2b2taka@gmail.com〉,
畑中 康郎 ktakasug@am.em-net.ne.jp
高橋 より（イラスト） junko328p@softbank.ne.jp

草の丘 第一六号
発 行 二〇一九年 六月三〇日
編集兼発行人 印旛文学の会 香取 淳
連絡先(携帯)とメール 080-5533-1002
katorijun27@gmail.com
ＵＲＬ http//bungeikusano-oka.raindrop.jp